

退職 互助だより

第160号

平成28.10.20

発行



一般財団法人 島根県教職員互助会
〒690-8502 松江市殿町1番地
島根県教育庁福利課内
TEL (0852) 22-6067



「そりのあるかたち」 澄川喜一 作

1992(平成4)年 島根県立美術館蔵

<2016年11月10日(木)~2017年2月20日(月) 島根県立美術館コレクション展示室5にて展示>

目 次

○第4回島根県教職員退職互助代表者会の 開催について……………2	◇随想 「二つの出会い」……………4
○医療補助金等の送金スケジュールについて……………2	◇地区会活動……………4
○送金通知書の口座番号非表示について……………2	○健康欄
○表紙作品解説……………2	◇もしも自分が認知症になったら……………5
○地区会だより 退職互助簸川地区会……………3	○事務局だより
◇老いての役割……………3	◇地区会連絡員にご協力を……………6
◇随想 女流俳人「出雲の千代女」……………3	○お悔やみ……………6
	○あとがき……………6

第4回 島根県教職員退職互助代表者会の開催について

去る平成28年6月29日、島根県教育会館において、第4回島根県教職員退職互助代表者会が開催されました。

例年、島根県教職員退職互助代表者会は、年に1回開催しておりますが、今回の会議では、互助会事務局から、近年加入率が下がっている退職互助制度についての現状を説明するとともに制度の見直しについて、意見交換をしたところ活発に意見が出されました。

事務局としても貴重なご意見として、今後、退職互助制度の検討の参考にさせていただきたいと思っております。

医療補助金等の送金スケジュールについて

11月、12月、29年1月の請求書提出の締切日・送金日は次のとおりです

締切日 毎月20日17:15まで (土・日・祝日の場合は前日)	送金日 毎月26日(土・日・祝日の場合は翌日)
平成28年11月18日(金)	平成28年12月26日(月)
平成28年12月20日(火)	平成29年1月26日(木)
平成29年1月20日(金)	平成29年2月27日(月)

<注 意>

締切日は、会員の居住地域を担当する支局及び事務局への到着日です。

請求書の提出先が各支局となっている方が、事務局へ提出されても構いませんが、その場合は、事務局から担当の支局へ転送し、支局への到着日が書類受理日となります。

送金通知書(はがき)の口座番号非表示について

個人情報保護のため、「送金通知書」に記載する口座番号の下6ケタを下記のようにアスタリスク(*)表示に変更しました。

表示例▶

送金先	〇〇銀行 ××支店
口座番号	1*****
名 義	ゴジョタロウ

変更時期▶平成28年10月26日給付の送金通知書から変更します。

表紙掲載作品解説

支点となる部分を一方の端に寄せ、さまざまなかたちの木材が絶妙なバランスをとって水平方向に大きく伸びるカーブを描いています。タイトルは《そりのあるかたち》。島根県鹿足郡吉賀町六日市生まれの彫刻家・澄川喜一(1931年～)の作品です。

「反り」は線や面が上方にむけて凹状に、逆に「起(むくり)」は凸状に湾曲していることをいい、「反り(照り)屋根/起り屋根」など建築をはじめ日本の伝統文化に深く根ざしているもので、澄川がライフワークとして追求し続ける造形です。「反りと起りは同じ。日本刀を横にして刃を上にとすると起りで、下にとすると反り(※)」と作家自身が端的に語るように、反りと起りは一体のものとして捉えられています。本作においても主要な弧はむしろ起りであり、反った短めの材がそれを受け止めて視覚的な均衡を構成していることがわかります。

よく見ると異なる2種類の材(樺と槐)が用いられています。木という素材は、質の硬さや曲直、色合いなど、ひとつひとつに違いがあり、それぞれ個性を主張します。作家は木の声に慎重に耳を傾けながら、切る・削る・磨く・寄せるといったプロセスのなかで素材との対話を深め、シンプルかつ不思議な魅力のある「そり」の造形を探り当てていくのでしょう。

※「好きなことを続けられれば夢かなう」『産経新聞』2012年3月17日

上野小麻里(島根県立美術館 専門学芸員)

老いての役割

退職互助簸川地区会

会長 三原 健史

私もまもなく八十歳を迎えて傘寿となる。老いへの突入！しかし、それがどうした！という心境でもある。今や現代は、四人に一人は高齢者と言われる。老・病・死は必ず来る。まさしく高齢者社会！私の身辺でも出会う人の多くが、いや、退職して久しぶりに我が家に居ると、毎日が長くて何をしてよいやら…とか、世間が分からないね…現職時代は殆ど他所で勤めていたので近所に誰がおられるやら分からないね…もう歳ですわ…。この後どう生きてよいやらね…。別に特技もないし…。

このように、退職してのち長い老年期をどう生きてよいのか、とまどっている人も多いのではないだろうか。

今や平均寿命も年々伸びている。私たち現職時代を三十七〜八年間とすれば、退職後の熟年期・老年期もほぼ同じ年数は生きるといえる。これからの人生を私は折り返し点でもあり、恩返しの期間とも考えている。そして地域にどう貢献することが出来るか、生き方を考えなくてはならないと思う。還暦を過ぎ、これからの折り返しとしての三十余年を老年期と思わず熟年期と思いたい…。

しかし、同じ仲間の中には何かの役をお願いに行くと、いや…もう歳ですからとか、これからは少しのんびりしたいとか、晴耕雨読の世界に浸るのが夢でしたから…、とかく引つ込み思案の人が多いうちにも感じられる。

地域創生と叫ばれている今、元教師として役割もいろいろと考えられるのでは…。適材適所と言う言葉の如く、地域にはいろいろな場があるはず。しかし、一概に言うて教職に就いていた人たちは、子ども

世界に精魂を注ぎ、一般社会に疎いとも思われている。

どんな地域に出かけていく事が大切で、世間の感覚になれることが必要と思う。そして、自分からどんな役でも進んで引き受ける努力も大切である。あくまで、そこにはこれまでの「裱」は脱ぎ捨てることである。一人の地域住民として、地域の活性化にどう貢献していけば良いかを自分なりの特性に照らして生きる努力をすれば、すばらしい人生であったと自覚できるのではないだろうか。

老年期いや熟年期にいる私たちは、想像力や表現力を発揮する力を持っていると思う。また、老年期の特徴は、全体を見渡す「深謀遠慮」をもつといわれる。ただし、熟年期・老年期を歩んでいる私たちは、これまでの蓄えた知識の切り売りだけでは、いつも通用するとは限らない。そこには、常に「知りたい」という欲求を持たねば進歩・発展はない。歳を重ねても尚日々探究心は持ち続けたい。

ソクラテスの言葉に「無知の知」がある。知ろうとする心を忘れては、進歩から取り残されてしまう。また、論語の「知るを知るとなし、知らざるを知らずとなす、これを知るなり」である。つまり知りたいという欲求は、いくら歳を重ねても無くならない。最近の研究では、歳を重ねても、頭脳はそれと同じくは歳は取らない、という現象が突き止められたらしい。

この実験により、「人間は年齢を重ねたから、老いるわけではない。理想・希望・責任感無くした時に老いる」という結果が発表さ



出雲市 子ども見守り隊

れた。

私も退職後地域に少しでも役に立ちたいと進んで関わってきた。ひとつ決めていたのは、一つの事にのみ関わるのではなく、地域全体に関わることによって、地域の現状を知ることが出来ると思える。

現在、区顧問・地域協議会・地域教育振興会・まちづくり部会・学校運営委員会・子ども見守り隊・同和教育推進委員会、そしてこの退職互助会に関わっている。「成せばなる、成さねばならぬ何事も、成らぬは人の成さぬなりけり」の心情で、地域に生きているという実感を味わいつつ「いい人生」だったと締めくくられたらと思う今である。



女流俳人

「出雲の千代女」

退職互助簸川地区会

大家 茂樹

江戸時代後期、杵築の町（現大社町）に女流俳人・松井しげ女という人があり、当時広く世に知られていました。それは、「朝顔に つるべとられて もらい水」の句で名を成した「加賀の千代女」と並び称されたことから、「出雲の千代女」とも呼ばれていたようです。

梅雨入りのあと、写真入りの一通のがきを頂きました。

拝啓 色あざやかな紫陽花が盛りこの頃です。いつも記念館にご支援を頂きましてありがとうございます。

この度 円通寺（大社町杵築西 小土地、松井家墓地隣）に、松井しげ女の句碑を建立いたしました。（中略）

おかげさまで念願の句碑を建立することが出来ましたことを報告させて頂くと共に厚くお礼を申し上げます。さっそく、案内にあった円通寺に出

かけた。円通寺山は、大社コミニュティセンター隣り、運動公園の西方にある小高い砂山です。墓地の坂道を通り抜けた頂上あたりに句碑は建立されていました。

写真で分かるように、台座の上に二種類二色の御影石をつかった、さわやかな感じのする句碑です。

そこには、「春けしき 立つや八雲のうす霞」と細やかなやさしい心づかいの「松井しげ女」作の句が彫られていました。ふるさと大社の先人顕彰の碑を訪ね、また、これを機にその秀句の鑑賞を心がけてみました。当時の情感に満ち満ちた文化に触れることが出来たことをうれしくかつ誇りに感じました実り多き今年の夏でした。

末尾になりましたが、二人の紹介を若干させていただきます。

「松井しげ女」は、出雲国神門郡常楽寺村（現湖陵町）の伊藤家に生まれ（元文二年・一七三七）、杵築の小土地村の廻船問屋松井屋三代目の長右衛門吉禮に乞われて嫁してきたと伝えられています。俳諧は、二十歳のころから精進してきました。結婚後は、杵築は越峠村に住まいする広瀬百羅に師事し、秀句を多く残し八十一歳で没しています。

建立者（差出人）の金築倫子さんは、現在は大社町北荒木に在住です。松井屋と縁のある長島家（杵築南は市場南町内）に生を受けられ、縁者の一人として、最近忘れ去られようとする「松井しげ女」を顕彰し、今一度その姿を甦らせようと熱意をもって活動されています。



句碑と筆者



二つの出会い

退職互助簸川地区会

副会長 岡田 敏幸

振り返れば、これまで実に多彩な出会いがありました。中でも楽しき二つの出会いを紹介します。

一つは私の前任地瑞穂町でのスキーとの出会いです。雪が降ると、子どもたちは畑の斜面をゲレンデに喜々としてスキーに興じていました。私は早速ボーナスをスキー用具に替え、毎日暗くなるまで子どもたちの特訓を受けました。ジャンプターンらしきことができた時の感動は今でも鮮明に思い出します。爾来スキーの爽快さに取り憑かれ、指導員として四十年以上指導に関わってきました。近年膝を痛め、カナダのウイスラーへの孫連れツアーを砌に現役引退をいたしました。



カナダのウイスラーにて

他の一つは絵との出会いです。

日展作家の板倉幸昌先生の下で勤務し、同僚と共に油絵を描く楽しさを教えて頂きました。

当時は互助会主催の美術展が毎年開かれ、第十回記念展には豪華な作品集が発行されました。私の作品も掲載され、貴重な所蔵品になりました。その後、板倉先生を講師に教職員互助会趣味の教室としての絵画教室が発足しました。三年後に「互洋会」と命名し、今私が会長職を引継いでいます。毎年会員の作品展を開催し、今年二十一回目を迎えました。

私は四年前から東光会山陰支部山光会にも所属し、会長の鳥屋尾敬先生に指導を受け、生涯初の百号を制作しました。いつの間にかのめり込み、美術とは全く不似合いな私が現在東光会会友です。勧めを真に受けて、無謀にも昨年から日展にも挑戦しています。私が絵を描いていることが分かる、多くの人がびっくり仰天されます。



島根日日新聞掲載記事より(平成27年5月23日付)

この二つに加え、今も続く短歌やほぼ毎日の朝テニス等との様々な出会いがありました。それにより遊びの世界、人との交友の世界が広がり、我が人生に多少の彩が加えられたように思います。

地区会活動

退職互助簸川地区会 常任幹事 三谷 明令

十二名の新入会員を迎え会員総数五百六十七名で二十八年度の事業を実施しています。主な事業は次のとおりです。

- 一 役員会・監査会(五・三月)
- (一) 事業・会計決算報告
- (二) 事業計画・会計予算審議
- 二 事務局会(各事業準備)
- 三 会員の集い・研修(講演会)
- (一) 総会・懇親会(六月)
- (二) 一泊研修旅行(十一月)
- (三) 園芸(十二月・正月用の花の寄せ植え・花の郷)
- (四) スポーツ(一月・ポリング大会、景品・参加賞あり)
- (五) 趣味の会(各グループ四名以上の会員で計画・実施)

○総会・研修会(六月二十三日)

- ・ 毎年六月に実施しています。
- ・ 前年度事業・会計決算報告
- ・ 本年度事業計画・予算案(役員会で審議・議決)の承認(出席者総数六十四名)

「ラピタウエディングパレス」の会場で県教職員互助会より曾田暢雄様、出雲支局より佐貫瑞枝様を迎え総会を開き、続いて世田谷区特別養護老人ホーム・芦花ホーム医師、石飛幸三先生の「おだやかに最期を迎えるために」という演題で「いつまでも生きてほしい」けれども「楽に逝かせたい」家族のジレンマについての貴重な講演をしていただ

き、その後、懇親会で楽しいひと時を過ごしました。

○園芸、スポーツ、趣味の会

○一泊研修旅行

毎年十一月の紅葉が美しい時期を楽しみに実施しています。平成二十七年の様子を載せてみます。

「紅葉の大歩危峡・祖谷のかずら橋と土佐高知の旅」

観光船で大歩危の景色を鑑賞、かずら橋を渡り、坂本龍馬の記念館では幕末の英雄龍馬を中心とした歴史・文化の町を見学、江戸時代より酒造りとして栄えた佐川町の竹村家住宅・旧浜口家住宅など旧商家の趣を残す建造物として活用されている町並みをガイドさんの案内で楽しく歩くことができ、旅のよい思い出となりまし



一泊研修旅行 高知県佐川町



もしも自分が認知症になったら

医療法人 釜瀬クリニック理事長 釜瀬 春 隆

私は今年3月で65歳になりました。高齢者福祉手帳、年金請求書、介護保険料、肺炎球菌ワクチン等々の書類が誕生日直前、立て続けに届きました。65歳イコール高齢者にはまだ違和感があります。Young Old、Old Oldという表現なら、しぶしぶ納得ですが……。良かったことは、仕事なら、高齢者の方の診察がやりやすくなりました。頭髮、姿勢、喋り方等々、少なくとも若造と思われることはなくなりました。

* 課題は記憶力

少し前までは、かなり昔の患者さんでも覚えていて、患者さんの方が感心してくれることもありました。ところが最近（開業して27年も経つと）、久しぶりの患者さんは、カルテを見ても思い出せないことがあり、「そうそう、そうでしたネ」と話しを合わせて苦笑いしている始末です。これが高じて全く思い出せなくなった場合は？ 薬の名前が出てこない、電子カルテが操作できない、職員からの指摘、患者さんからの指摘も想定されます。その時私はどうするだろう。もっと端的に言えば、認知症の診断を受けたとして、その後の私はどのような生き方ができるのか？ この機会に考えてみたい。

※久山町（福岡）の調査（平成27年）によると、60歳以上の健常高齢者が生涯に認知症になる確率は55%、つまり二人に一人は認知症になることとなります。

* 絶望と偏見の中で

できないことが増える、自分が自分でなくなる、人に迷惑をかける、遠慮と引け目、日々身をすくめるようにして生きることになるのでしょうか。周囲の哀れみと同情、こんな思いをするならいっそ死んだ方がまし…と思うのでしょうか。

大勢の方と関わってきて感じたことは、苦渋に満ちた方は意外と少なく、不安と困惑の一方で淡々と一日いちにちを過ごしている方が殆どのように思います。私も、たまたま認知症になった、幸せではないが、嘆きもしない、そんな心境で過ごすと思います。

* 認知症になって思ったこと

（ある患者さんの体験に共感したものです）

子どものように扱われます、時には赤ちゃん言葉も使って…。ひょっとしてこれは親切にしてくれているのかもしれませんが。ただでさえ認知症になって自信を失くしているのですから、情けないです。“何かしたいことはありませんか？”と聞いて欲しいです。自信を取り戻すように、そっと背中を押して欲しいのです。

カミングアウト（誰かに打ち明ける）

同情や哀れみの目を感じるのが嫌で、親しい人との関

係が壊れるようで、当初は言えないと思います。現実には、気づいていても変わることなく接してくれる人が大半と思いたいのです。その後は、認知症であることを公表して支援を受けることを選択します。認知症になった人にしかできない役割（当事者同士の支え合い、当事者自身から社会への働きかけ）があると思っていますから……。そうすることで偏見を無くしていきたい。ヘルプカード（困った時に通りすがりの人に見せて支援してもらおう）が使える社会にしたいです。

* 仕事について

認知症の人がまだできることに注目して仕事を探して欲しいです。認知症になったお花の先生の場合、高弟のお弟子さんが以前と変わりなく稽古に来て、先生に教えてもらっているそうです。手順ではなく心を教わっている、と聞きました。

私の場合は？ 診察と称して認知症の患者さんと穏やかなひと時を過ごしたい。診察料はいただけないが、それをご家族が承知で来院していただける患者さんがあればの話です。

* 認知症が進行した場合には

この時点では医師としては用を成さないでしょうから、誰かからの、“そろそろ潮時ですよ”という言葉で、診察室を後にします。その後は穏やかな笑みを浮かべて過ごしたいです。読書はしたいが、格好だけになるでしょう。そのままこっくりこっくり居眠りをするのもいい。

* 認知症の人が生き生きと暮らせる社会

自信を失う人、外出が怖くなり引きこもる人が多くいます。家族はもちろんですが、支援してくれる人の存在が大事です。一緒に活動をしていくことが大事だと思っています。認知症の私が発信するメッセージを読みとる技術と心構えのある人に支援していただきたいです。聞き耳頭巾をつけたつもりで、私の話を聞いてもらいたいです。

* 尊厳と希望

進行して言葉も発しない、理解もできない、歩行ができず、食事、排泄は全介助してもらおう状態になりました。こうした状態で、何が尊厳でしょう、果たして希望があるのでしょうか？ 否、希望はあります。こうした状態だからこそ、それまでの多くの人との関係性に希望が見出せるはず。そのためには、人と人の本当の関係が築けていて、最後に寄り添う関係が残っているはずですから……。

事務局だより

県外会員の皆様へ

退職後ご出身地へ転居された方、ご親族の下へ転居された方など、現在二・五五人の方々が県外に住まわれています。北海道から沖縄県まで、全国各地域にお住まいです。

東日本大震災以降、各地で大規模な災害が発生しておりますが、被災地にお住まいの会員の方も少なくありません。昨年八月の土砂災害の広島市にお住まいだった会員の方や、ことし四月の熊本地震についても、熊本市と大分市在住の会員の方がいらつしやいました。遅くなりましたが、改めてお見舞いを申し上げ、被災地の一日も早い復興をお祈りいたします。

県外会員の方は、退職互助各地区会会で実施される活動に参加することができません。そこで、地区会への助成に替え、県外会員特別事業を実施しています。近年は、図書カードをお送りしています。来年一月の「退職互助だより」の配付に併せてお届けしますので、ご活用ください。

文化講演会満員御礼

平成二十八年度文化講演会（講師 鎌田實氏）については、会員をはじめ、多くの皆様にお申込みをいただき、定員（千人）に達しました。

ありがとうございました。

退職互助制度に関するアンケート調査の実施について

退職互助医療給付の対象年齢の延長など、退職互助制度に対する会員の皆様からのご要望にお応えするため、アンケート調査を実施し、会員の皆様のご意向を伺うことになりました。調査対象（年齢）やアンケート内容は現在検討中ですが、対象の皆様には、後日、直接調査用紙をお送りしますので、ご協力よろしくお願いいたします。

地区会連絡員にご協力を

本十月号から今年度新たに加入された方々にも、各地区会連絡員の方にお届けいただいております。退職会員への緊密な情報提供を行うため、県内各地区会会長から推薦された五七二人の連絡員の皆様の御協力により配付していただいております。

この連絡員システムは、会員から会員宅へ手配りすることにより、会員相互のコミュニケーションのきっかけや単身世帯の方等への気配りをもたらし、互助会ならではのボランティア精神にあふれる仕組みです。

連絡員の任期は、毎年十月から翌年九月までとなっておりますが、ほとんどの方に長年にわたり継続してお引き受けいただき、退職互助だよりのほか、地区会独自の広報や事業案内等についても配付していただいております。今回発行号から新しい連絡網で配付されることとなりますので、皆様のご理解とご協力を願います。

また、配布物が遅滞なく円滑にお届けできるよう、住所の異動が生じた場合などは、すみやかに所属地区会担当幹事さんまでご連絡いただきますようお願いいたします。

謹んでご冥福をお祈りいたします

錦織喜三恵 様 (松江市) 19. 4. 10 (81歳)	周藤 政道 様 (雲南市) 28. 7. 7 (88歳)	中島 篤 様 (出雲市) 28. 8. 11 (79歳)
坂本 玲子 様 (出雲市) 27. 12. 1 (83歳)	徳原 淳子 様 (江津市) 28. 7. 8 (75歳)	土井 邦雄 様 (松江市) 28. 8. 14 (87歳)
飯橋 一夫 様 (安来市) 28. 1. 5 (91歳)	犬山 嘉朋 様 (松江市) 29. 7. 18 (89歳)	古居 貞子 様 (出雲市) 28. 8. 24 (89歳)
島崎 英子 様 (江津市) 28. 4. 13 (88歳)	渡部 剛好 様 (雲南市) 28. 7. 19 (60歳)	河瀬 秀行 様 (出雲市) 28. 8. 30 (73歳)
東 正恵 様 (浜田市) 28. 4. 15 (81歳)	錦織清一郎 様 (出雲市) 28. 7. 23 (89歳)	石飛 満 様 (出雲市) 28. 9. 6 (93歳)
山田 三郎 様 (松江市) 28. 5. 11 (86歳)	山崎 光造 様 (大田市) 28. 7. 25 (92歳)	飯塚 幸久 様 (出雲市) 28. 9. 8 (90歳)
谷戸スエ子 様 (岡山市) 28. 5. 22 (89歳)	野上 悦子 様 (松江市) 28. 7. 26 (85歳)	佐々浦愛子 様 (浜田市) 28. 9. 10 (86歳)
藤田 正男 様 (益田市) 28. 5. 26 (94歳)	瀬崎 寛 様 (松江市) 28. 7. 27 (91歳)	天野 幸三 様 (江津市) 28. 9. 11 (95歳)
山本真佐子 様 (浜田市) 28. 5. 28 (65歳)	吾郷マチヨ 様 (出雲市) 28. 7. 28 (93歳)	西島 正道 様 (松江市) 28. 9. 17 (94歳)
齋藤 道親 様 (大田市) 28. 6. 1 (82歳)	木邑 恂 様 (岡山市) 28. 8. 10 (96歳)	吉岡 茂 様 (出雲市) 28. 9. 18 (101歳)
藤井 哲子 様 (松江市) 28. 6. 6 (91歳)	山本ミチ子 様 (大田市) 28. 8. 10 (91歳)	渡部 邦三 様 (江津市) 28. 9. 24 (99歳)
松浦 義武 様 (西ノ島町) 28. 6. 11 (96歳)	曾田 忠昭 様 (松江市) 28. 8. 10 (87歳)	

あ と が き



半世紀前、東京オリンピックの年は「東京五輪音頭」が日本中を席巻しました。歌詞は、当時の県庁職員であった宮田隆さんによるものです。懐かしく思い出される方も多いのではないのでしょうか。

今年のリオは再びの東京を見据え、島根出身選手も含めた日本勢は大健闘でした。簸川地区会からも、皆様のご活躍が伝えられ、ご寄稿も興味深い随想をいただきました。「出雲の千代女」は、女性の名が文化面で残ることは稀な江戸時代のお話です。没後二百年経って、句碑が建てられるなどの顕彰に、大きな意味を感じます。

身体的なことと共に、メンタルな面からも自らを見直すことは大切なことと思われまます。健康のページでは、釜瀬先生のご体験や思いが書かれ、親しみを持って読ませていただきました。簸川地区のご寄稿にあるように、自分の健康を自分のものとして考えることの大切さを学びます。

表紙絵は、本県に深い関わりがある澄川喜先生の作品です。県立美術館は九月末、開館以来入館者数が五百万人となりました。作品をご覧になる機会を持たれればと思います。芸術の秋が深まり行くのを感じます。健康第一で過ごしたいものです。

(古浦)